

平成 30 年度第 1 回兵庫県スポーツ推進審議会 議事録

1 期日・場所 平成 30 年 9 月 11 日（火） 10:00～12:00
兵庫県立ひょうご女性交流館 「501」
〒650-0011 神戸市中央区下山手通 4 丁目 18-1

2 出席者
(委員 10 名) 山口委員 平野委員 倉委員 吉矢委員
恒木委員 増田委員 廣瀬委員 窪田委員
三木委員 陳委員

欠席：平川委員 尾山委員 小林委員 鷗木委員
石角委員

(幹事 10 名) ○一幡幹事 ○市村幹事 岡田幹事 成田幹事
○西田健幹事 ○小俵幹事 ○西田利幹事 ○土屋幹事
升川幹事 長島幹事

欠席：藤原幹事 八木幹事

山根スポーツ振興課参事（陪席）
○三浦兵庫県体育協会事務局長（陪席）（○印は代理出席）

(教育委員会) 西上教育長

(事務局) 漁副課長 岡本主任指導主事兼主幹
坪田主任指導主事 加藤指導主事

3 開会あいさつ 西上教育長

4 委員・幹事紹介 名簿順による委員自己紹介及び幹事紹介

5 署名委員の指名 署名委員は、窪田委員、三木委員に決定

6 前回議事録の報告

平成 29 年度第 2 回スポーツ推進審議会における報告事項（「平成 30 年度事業概要について」及び審議事項（「平成 30 年度スポーツ振興団体に交付する補助金について」「兵庫県スポーツ推進計画の取組を進めるための方策について」）について承認された。

7 審議事項

(1) 兵庫県スポーツ推進計画の改定について

《平成 30 年度スポーツ推進本部会議報告》

① ワーキンググループの設置及び今後のスケジュールについて

事務局より、兵庫県スポーツ推進本部会議での報告内容及び、見直しの経緯について説明した後、ワーキンググループの設置について説明し承認された。

② ワーキンググループのメンバーについて

ワーキンググループのメンバー選定等の具体的な進め方について事務局及び会長に一任することが承認された。

(2) 兵庫県スポーツ推進計画（基本計画・実施計画）の改定について

事務局より、平成 29 年に文部科学省が策定した第 2 期スポーツ基本計画の概要につ

いて、及び兵庫県スポーツ推進計画の改定に係る視点を、

- ①「国の第2期基本計画を踏まえた見直し」
- ②「ゴールデン・スポーツイヤーズの視点を盛り込んだ見直し」
- ③「指標の項目や数値目標の見直し」

その後、特に達成状況が△（達成率70%以上90%未満）、▲（達成率70%未満）の項目について委員のご意見をいただいた。

8 報告事項

- (1) 「第73回しあわせ元気国体」について
事務局より、近畿ブロック大会結果について報告した。
- (2) 「第18回アジア競技大会」について
事務局より、本県ゆかりの選手の活躍について報告した。

■ 委員の主な意見及び事務局の説明

審議事項2 兵庫県スポーツ推進計画（基本計画・実施計画）の改定について

①「国の第2期基本計画を踏まえた見直し」について

【平野委員】

- 「5-1大学や企業と連携したスポーツイベント」あたりは、特に地域貢献として今、大学も開かれた大学をめざして、設備も非常に整っており、小中高と連携していく仕掛けをつくってもらえると、幼児教育や食育などいろんな分野からスタッフのサポートもできるので、もう少し活性化できる余地はあるのではないかと。

【事務局】

- 現状は▲（達成率70%未満）で、目標値には至っていない。施策としては、社会人に新しいチームをつくってスポーツクラブ21ひょうごに加入してもらって、その初動経費等を補助していくというような施策を実施している。また、先日、兵庫体育・スポーツ科学学会とスポーツクラブ21の中で連携協定を締結し、指導、運営の支援というところも含めて、大学の持っている力をお借りして、一層のスポーツクラブの活性化を進めていきたいという取り組みを始めたばかりであり、今後協議を深めていく流れになっている。

【吉矢委員】

- 日本版NCAAをつくるのは、どういうものをつくったらいいのかという方針も定まらず苦勞されているようで、結構時間がかかりそうな印象がある。
- このところ英語の標記が多い。響きはよいが、「インテグリティ」「レガシー」といった英語の意味について、共通の理解がなされているのか。
- 障害者の「がい」はスポーツ政策関係では、だいたいひらがなになっているのではないかと。

【増田委員】

- 障害者の「がい」については、法的には漢字を用いている。なかなか一様にできない。

【山口委員】

- 自治体によっては条例で定めて漢字は使わず平仮名にしているところも増えてきているが、国の法律では漢字を使っている。
- 日本版NCAAについては、もう少しかかると思うが、動き出したことは事実である。

【平野委員】

- スポーツを通じた健康増進について、妊産婦さんの産後のスポーツケアは急務だと思う。体を動かすような機会があれば、産後の女性の自殺にたいしてメンタル面で効果があるのではないか。
- 運動する子どもとしない子どもの二極化は大学でも感じられる。スマートフォンの病的な使用により、引きこもる方向に入っていく、運動しなくなるといった状況は10年前にはなかった。

【事務局】

- 女性スポーツについては、今「ひょうご女性スポーツの会」という、組織の立ち上げに向けて準備を進めている。12月15日に設立総会を実施する予定である。今後、この会を通じて女性スポーツの活性化について発信していくために、現在計画を進めている。

【事務局】

- 体力とスマートフォンの使用のみの関連については、体力運動能力調査の項目には入っていない。

【倉委員】

- 産後のお母さんの精神的なケアというのは、ヨガなど軽度の運動をすることによって軽減されるというような報告もある。赤ちゃんとお母さんが一緒に何かをするというような受け皿があれば、お母さんが運動を好きになることで、子どもも好きになり、運動機会が増えていくというつながり方をするのはないか。お母さん同士や地域とのかかわりにもなる。
競技スポーツに限らず、幅広い女性のスポーツ支援のプログラムを望む。

【窪田委員】

- 8割強の中学生が何らかの形でスマートフォンを使える状況にある。帰宅後3時間以上使用している生徒もいる。運動能力の低下にも中学生のみならず小さい頃からの遊びを通して運動に親しむということにも関係しているのではないかと思う。
- 部活動について、子どもの体力や競技力を向上させるというが、実際に行っていくのには難しさがある。休みの設定や猛暑による活動の制限など、スポーツ庁から色々おりてくる。また、指導にあたるのは専門競技の先生方ばかりではない。大学との連携などといったことも田舎の学校では難しいが、手軽に出来るようになっていけばと願う。

【山口委員】

- 働き方改革のなかで部活動を地域スポーツと一体化するという方針が、国から出てきている。実際どういう風に対応していくのか。残業時間の上限も決まり、教員に全部依存するということはもうできない。県の推進計画でも審議していかなくてはならない。

【三木委員】

- 高齢者のスポーツは浸透してきたと思うが、子どもについてはスマートフォン依存やゲーム依存などから、子供同士で鬼ごっこなどして遊ぶというスポーツに入る前段階が消えてしまい、特定のスポーツでクラブに入ったりする子どもだけが競技者として運動している状況になってしまっている。それ以外の子どもたちはゲームの方が主といった状況になってしまう。子どもたちのスポーツ離れは問題になってくるのではないかと危惧している。

【事務局】

- 部活動については、昨年、今年と県で4校、モデル的にヨガやリズムダンス、ゴルフなど外部指導者にお手伝いいただく事業を実施している。既成のチャンピオンスポーツだけではなく、そういう場も必要ではないかと考え、実施している。
- 部活動に関する、総合的なガイドラインの兵庫県版を9月6日に策定した。休養日の設定、市町における部活動指導員、大会や合宿練習など、生徒の健康面と、職員の働き方の両面からきちっと見直して管理してこうと考えている。
- 学校でスポーツに親しむことが、優秀な選手の輩出や、生涯スポーツに親しむための入り口になっている。部活動がスポーツ環境の1つとして、何が出来るのか皆さんとともに考えていきたいとお願いをしている。
- スマートフォンの使用とテレビの視聴時間ともあわせた相関はスポーツテストの調査票の中にはある。

【山口委員】

- 今話題になっているeスポーツについて、国体やアジア大会では入ってきそうだとかというニュースが来たら、IOCのトーマス・バッハ会長が否定するなどといった現状で、どのように扱うべきか。

【平野委員】

- eスポーツの場合、練習が深夜にあたるので、睡眠障害の問題が考えられる。

【陳委員】

- アジア大会の競技種目にブリッジが入ったりしている。アジア大会だということでスポーツ面に掲載することがあっても、通常の大会でスポーツ面に掲載することはない。競技スポーツとして認定するかどうかは微妙なところである。欧米ではスポーツも全部ゲームという言い方になるが、日本で思っている概念と違う部分がある。サーフィンやスケボーといった、中学校・高校でも国体でも実施されないような種目がオリンピック種目に入ってくる中、どれが競技スポーツでどれが競技スポーツではないか判断するのは難しい。

②「ゴールデン・スポーツイヤーズの視点を盛り込んだ見直し」について

【増田委員】

- ワールドマスターズゲームズにチャンスがあれば参加したい、という障害者スポーツ選手からの声が聞こえてくる。前回をはるかに上回る障害者が参加する大会になればと願っている。

【山口委員】

- 障害者スポーツは自治体間格差が非常に激しいが、兵庫県は全国のモデルではないかと思っている。

【廣瀬委員】

- オリンピックに選手として出場する選手は限られており、何人選手を出したとか、兵庫県の選手がどれだけ活躍したかというのも1つの指標になるのかも知れないが、それ以上にそれに関連して体を動かそうとか、そういうイベントを手伝おうとかという子どもや若者が増えてほしいという思いもあり、何かそういう指標なり目標なりができればよいと思う。

【山口委員】

- オリンピック・パラリンピックのホストタウン事業などを通して、スポーツを通じたまちづくりや、子どもとアスリートとの交流などができるような議論が進めばと思う。
- スポーツツーリズムの概念というのは、現行計画の策定時には考えられていなかった。特にワールドマスターズゲームズには、観光志向が非常に強い人々が来訪するので、受け入れやもてなしなどの議論を進める必要がある。

③「指標の項目や数値目標の見直し」

【廣瀬委員】

- 「1-3 学校における事故発生件数の減少」は単に生徒数の減少によるものではないか。スポーツ・運動を一生懸命やらせたら増えるのではと思う。また、この数値はスポーツ振興センターの給付金が出た回数なので、そこにあがってこない怪我もある。

【事務局】

- 現状は、目標値よりかなり多い件数となっている。小さな怪我でも受診するケースが増えていることや、スポーツ振興センターの給付制度自体が浸透してきていることも考えられる。

【窪田委員】

- 例えばたつの市では中学生の医療が無料になっており、スポーツ振興センターへの給付金申請件数は減少している。そうしたことも減少の一因なのではないか。

【山口委員】

- メディアでスポーツの場面における多くの暴力事件が報道されている。絶対に暴力を用いたスポーツ指導はいけないということが浸透しなければならないが、なかなか減らない現状がある。

【増田委員】

- 「4-2 障害者スポーツとの連携に取り組む「スポーツクラブ 21 ひょうご」の増加」について、障害者の地域におけるスポーツの取組は公共の施設によるものが多い。公共施設であればハード面を整えるなどの努力目標が設定しやすいが、スポーツクラブ 21 ひょうごに障害者スポーツを推進しようというような意識付けを求めるのは現実的に難しい。

公共の体育館でも、窓口で障害者かどうかということを必ず確認するわけではない。また、実際障害者が活動に参加していても、障害者スポーツ協会と接点がない場合もあり、視点を代えていかなければならないのではと思う。

【事務局】

- 障害者がスポーツをする場の確保については、県内の大学・企業・団体とスポーツ応援協定を結んで施設を利用させていただき取組や、特別支援学校などのバリアフリー化の取組などを引き続き進めている。

【倉委員】

- 「1-1 スポーツをする子どもの増加と体力の向上」について、スポーツというクラブ等に入っているという捉え方になるのではないだろうか。競技スポーツというだけではなくて、スポーツあるいは動くことが好きというようなものまで含んでいくのであれば、設問項目をもう少しわかりやすいものにした方がよいと思う。

【平野委員】

- 「2-2「スポーツクラブ 21 ひょうご」の会員数の増加」については、現状として減少傾向にある中、最終目標値が 55 万人とかけ離れている。この辺りはどのように考えているのか。

【恒木委員】

- スポーツなどしなくてもスマートフォンのゲームでよいという人が増えてきている中で、会費を払って総合型のスポーツクラブに入ろうとはなかなかしてくれない。姫路市はスポーツ推進委員がスポーツクラブ 21 ひょうごの運営もしているが、会員の減少、役員の高齢化が進んでいる。

【事務局（スポーツ振興課）】

- 県民の 1 割となる 55 万人を最終目標値に設定しているが、今では現状維持が精一杯の状況にあり、適正な最終目標値を設定させていただきたい。
- 目標値については、運動未実施者がゼロというのも現実的に不可能な最終目標値であり、検討させていただければと思う。

【陳委員】

- 「1-1 スポーツをする子どもの増加と体力の向上」について、スポーツができる公園などで、実際禁止されているケースが増えている。学校以外でスポーツができる環境の整備をもう少し考えたらよいのではと思う。

11 閉会あいさつ 長島スポーツ振興課長

12 閉 会